様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：１４３０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０１０８

研究課題名（和文）１５世紀～１７世紀日本絵画における中国主題の受容と変容

研究課題名（英文）The acceptance and the transformation of Chinese Image in 15th-17th Japan.

研究代表者
並木　誠士（Namiki, Seishi）

京都工芸繊維大学・工芸科学研究科・教授

研究者番号：５０２１１４４６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、中国絵画の受容と変容という観点から、以下の内容を明らかにした。
狩野派の絵師にとって、中国で成立をした画題、様式を咀嚼するために有効であったのが、狩野探幽の時期に制作された一連の「流書手鑑」で、ここでは、画家名と画題、様式の固定化が進められた。しかし、李安忠のように、異なる二種の画題、様式のそれぞれが固定的に伝承された例もあった。一方、中国伝来の画題が和様化した事例として酒飯論絵巻をあげた。中国で成立をした酒茶論をベースに成立をした酒飯論絵巻は、繰り返し模本が制作されることにより、様式と図像の踏襲がはかられるが、そこでは、白描本の酒飯論絵巻が重要な役割を果たしていることを指摘した。

研究成果の概要（英文）：In this study, I clarified the following contents from the point of the reception and the transformation of the Chinese picture.
For the Kano school painters, the series of "Ryusho tekagami" were most convenient materials to know the painter’s name, his motif, and his style of painting in China. On the other hand, I treated the Shuhan-ron- emaki as the example that the Chinese motif handed down transformed to the Japanese style in 16th century Japan. We can see the inheritance of the style and the iconographic image in the Shuhan-ron-emaki in several copies of this emaki. And, in there, I pointed out that the black and white version of this emaki played a very important role.

研究分野：日本美術史

キーワード：狩野派　韃靼人図　瀟湘八景図　流書手鑑　酒飯論絵巻　狩野元信　李安忠　白描

１．研究開始当初の背景

室町時代には、中国からさまざまな画題が伝来して、それが徐々に日本人絵師により制作されるようになってきたことは広く知られている。しかし、その具体的な様相、実態はあまりわかっていない。それに加えて、そのような画題を日本人絵師がどのように受容し、さらには、変容しながら継承していったかという点についても、十分な理解が得られているわけではなかった。

一方で、大規模な展覧会の開催など、室町から江戸時代にかけての狩野派の絵師によるあらたな作品が紹介されるという状況が続き、狩野派が、新しい画題をどのように流派内に蓄積していったかという点についても徐々に新しい知見を得ることができるようになってきた。

とくに、東山御物に関する、徳川美術館、三井記念美術館における展覧会は、足利将軍家の唐物コレクション、とくに、絵画のコレクションについて、多くの新しい知見を提供した。

２．研究の目的

本研究においては、室町時代後半から、桃山、江戸時代前半を射程に入れて、中国で成立した画題をわが国でどのように受容したのか、そして、狩野派における中国絵画受容がどのような様相を示しているかを明らかにすることを目的とした。

中国絵画、とくに、水墨画の伝来とともに伝来した新しい画題と表現方法が、15 世紀から 16 世紀の日本の絵師たちに大きな影響を与えたことは言うまでもない。

そこでは、中国画人の名前とその特徴的な表現様式、画題がいわばセットで受容されることになる。それは、君台観左右帳記などの記述からも伺えるが、具体的な作品として、本研究では、狩野探幽以降に充実してくる一連の「流書手鑑」の存在に注目した。

「流書手鑑」は、おもに中国人画家の名前とその代表的な主題、表現を「真似」て制作したもので、多くは狩野派の絵師の手になる作例が数点現存している。

本研究では、未紹介の「唐画巻」を含む作品を調査し、狩野派の絵師が、中国画家の名前と画題、様式をどのように理解していたかを検討した。なかでも、李安忠に注目をした。

李安忠は、室町殿の障壁画に関して「狩猟」図とのかかわりが指摘できる絵師である。たしかに、一連の「流書」のなかに、李安忠の名を付した狩猟図を数点認めることができる。しかし、一方で、根津美術館に所蔵される国宝鶉図が李安忠の作品であることがほぼ確実であり、「流書」のなかにも鶉図に李安忠筆と記されている例も認めることができる。

李安忠に注目したのは、足利義政邸である東山殿に、李安忠様式の狩の図があったと考えられることに起因するが、現存する作品のなかで李安忠筆の伝承をもつものは、いずれも、鶉図のような繊細な筆致による花鳥図になっている。

このような状況を整理して、狩野派における中国絵画受容とその変容の様相を明らかにすることが、本研究の第一の目的である。

また、16 世紀前半に制作された酒飯論絵巻に着目して、中国における酒茶問答との画題的な関連、そして、狩野派内において多くの模本が制作されてゆく流れを分析することを通して狩野派における画題の継承を考える。

酒飯論絵巻の成立に中国における酒茶論が大きな影響を与えていることは言うまでもないが、その実態は明らかではない。とくに、現存する酒茶論が「画面」をともなっていないという点で、酒飯論絵巻との関連を突き止めることは難しい。本研究課題では、16 世紀前半に成立をした酒飯論絵巻が伝来する過程で、江戸時代以降、多くの模本が制作されることに注目した。

酒飯論絵巻は、原本と考えられる作品（文化庁所蔵本）が 16 世紀の前半に制作されて以降、狩野派の絵師を中心に多くの模本が制作されるようになる。そこでは、忠実な図様と様式の踏襲がはかられるが、そこにおいて、色の指示などをともなう文化庁所蔵本に代表される一連の白描本酒飯論絵巻が重要な役割を果たしており、なかでも文化庁本は、一連の白描本のなかでも初発的な様式を示し、重要な位置を占めていることを指摘した。

３．研究の方法

上記したように、まず、一連の「流書」における画家名と画題、様式などを整理して、そのなかで李安忠に関連する資料を中心的に考察する。具体的には、大和文華館、栃木県立美術館などで作品調査をおこない、資料収集に努めた。

「流書手鑑」相互には、李安忠のように、共通する画家であっても、異なった画題として取り上げられているものも多く、そうでない画家との関係も含めて、手鑑自体の編集方針、伝来の経緯などを分析してゆくことが必要であることがわかった。その観点から、奥書を有する愛媛県個人蔵の唐画巻は、重要な位置を占める作品として考察の対象とした。

酒飯論絵巻については、文化庁が所蔵する白描本がやはり奥書を有することか

ら、この作品の奥書、および、画中の色指示等の分析を進めることとした。

４．研究成果

上記の調査のうち、「流書手鑑」に関しては、本申請期間中に主要作例の調査を終えて、平成 27 年度内に論文としてまとめる準備を進めている（「狩野派における中国絵画の受容－一連の流書手鑑を手がかりに－」『大和文華』平成 28 年度刊行予定）。

また、これに連携するテーマとして、桃山時代から江戸時代初期の狩野派の、組織としてのあり方、および、その制作形態については、以下にまとめた。

「狩野宗秀「遺言状」をめぐる考察」（『原本『古画備考』のネットワーク』思文閣出版、平成 25 年）では、『古画備考』に収録されている狩野宗秀の遺言状を再読することにより、狩野元信を「古法眼」として持ち上げる意識が、かつて発表者が指摘した江戸時代初期よりも早く、16 世後半の元信没後間もない時期にすでに生まれており、それが、狩野派の流派意識形成に大きな影響を与えたことがわかった。このことは、酒飯論絵巻の模本制作と伝承を考えるうえでも重要な点である。

また、「近代日本における「桃山」の発見」（『美術フォーラム 21』28 号、平成 25 年）では、明治時代の前期においては、一時期桃山時代の美術が室町時代とは異なるものとして低い評価を受けており、それは、1901 年の『稿本日本帝国美術略史』にまで反映しており、ようやく明治時代後半になり土田杏村が智積院、聚光院などの障壁画に注目をすることにより脚光を浴びたことを明らかにした。また、「画道要訣－江戸狩野の理論的支柱」（『芸術理論古典文献アンソロジー　東洋編』、京都造形芸術大学・東北芸術工科大学出版局藝術学舎、平成 26 年）では、狩野安信が狩野探幽様式を踏襲するにあたり、理論的にその必要性を述べていることをまとめた。

酒飯論絵巻に関しては、手順としては、あらためて原本が文化庁本であることを確認して、そこから、図様の継承関係をたどることにより、酒飯論絵巻の原本と、そこからの模本制作による継承について考えた。この研究の成果は、パリ国立図書館所蔵の酒飯論絵巻が紹介されたのを契機として発足した研究会が編纂した『『酒飯論絵巻』－影印と研究』（臨川書店、平成 27 年）に「酒飯論絵巻再考」としてまとめた。ここでは、かつて執筆をした酒飯論絵巻の原本についての論文（『美術史』掲載）の見解を補足する方向で、文化庁本が原本である可能性を論じ、また、構図分析など表現のメカニズムを分析することを通して、文化庁本の特質を明らかにした。

また、「酒飯論絵巻には何故模本が多いのか？－白描本酒飯論絵巻をめぐる考察－」（『美術フォーラム 21』31 号、平成 27 年）では、近年発見されたパリ本をはじめとして、茶道資料館本、京都大学本など酒飯論絵巻には多くの模本が制作され続けていることを指摘したうえで、それが、狩野派における元信顕彰の動きと連動していること、そして、その模本制作にあたり、克明な色指示などをともなう文化庁所蔵本のような良質の白描本が重要な位置を占めていることを明らかにした。

これらの作業により、15 世紀～16 世紀にかけて、狩野派を中心とする日本人絵師が、中国で成立した画題をどのように受容し、どのように変容し、伝承していったかという点の一端が明らかになった。

また、画題継承の問題については、2015 年 5 月に韓国の梨花女子大学博物館で開催された国際シンポジウムにおいて、「美術と理想」という枠組みのなかで、洛中洛外図とその理想化による画題継承の意味について研究成果を発表した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 7 件）

①<u>並木誠士</u>「画道要訣－江戸狩野の理論的支柱」『芸術理論古典文献アンソロジー　東洋編』pp.321-328　（査読無）
京都造形芸術大学東北芸術工科大学出版局藝術学舎 2014 年 6 月

②<u>並木誠士</u> Idealized Kyoto: Changes of Rakuchu Rakugai-zu Paintings, ”ART AND IDEALS ”
EWHA Womans University Museum,pp.138-143、2014 年 5 月、（査読無）

③<u>並木誠士</u>「近代日本における「桃山」の発見」『美術フォーラム 21』28 号、pp.69-73、醍醐書房、2013 年 11 月、（査読有）

④<u>並木誠士</u>「日本美術における紙と絵画」『紙－昨日・今日・明日 』日本・紙アカデミー編、pp.66-71、（査読無）
思文閣出版、2013 年 9 月

⑤<u>並木誠士</u>「京都高等工芸学校収蔵の日本美術資料――漆芸品を中心に―― 」『東西文化の磁場　日本近代の建築・デザイン・工芸における境界的作用史の研究』pp.103-126、国書刊行会、2013 年 3 月、（査読無）

⑥<u>並木誠士</u>「狩野宗秀「遺言状」をめぐる考察」『原本『古画備考』のネットワーク』pp.263-283、（査読無）

思文閣出版　　2013 年 2 月
⑦並木誠士「「秀松」印扇面貼交屏風」『聚美』、青月社、pp.110-115、2012 年 7 月、（査読無）

〔学会発表〕（計 1 件）
① Seishi NAMIKI, Idealized Kyoto: Changes of Rakuchu Rakugai-zu Paintings, ”ART AND IDEALS ”EWHA Womans University Museum, Seoul（South Korea）2014 年 5 月 16 日

〔図書〕（計 1 件）
①並木誠士ほか編『京都　伝統工芸の近代』p269、思文閣出版、2012 年 9 月

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）
該当無し

○取得状況（計 0 件）
該当無し

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
並木誠士　（Namiki Seishi）
京都工芸繊維大学、工芸科学研究科、教授、研究者番号 50211446

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし